

# 『魚玄機』論

山崎 一 穎

『魚玄機』は大正四月七月十五日発行の「中央公論」(第三十年第八号)に掲載された關外九篇目の歴史小説であり、脱稿は同年七月七日である。従来この作品についてはあまり検討されていないので、本論稿では『魚玄機』執筆の動機、史料の作品への形象化、並びに作品の位相について、考察してみようと思う。

一

『魚玄機』執筆の動機について考察する前に、執筆の時期について触れておきたい。日記を見ると、「大正四年六月四日(金)晴。文求堂に往きて温飛卿集を買ふ。」とあり、更に「大正四年七月七日(水)雨。魚玄機を舂し畢る。」という記事から判断して、一応『魚玄機』執筆の意志が動いたのは六月四日以降は下りえないと考えられる。しかし、關外がこの作品執筆に用いた原史料―『唐女郎魚玄機詩』を見ると、「<sup>(注)</sup>佐々木信綱君将来」という關外自身の書込みがあり、これから判断して、この本が佐佐木信綱氏から送られたことがわかる。そこでなお明治三十七年二月九日付の書簡を繰って見ると、

「御寵贈之詩集今日一讀仕候其附録ヲ見レバ作者ハ別品ニテ女道士兼藝者ト云フヤウナ人物ナルニソレガ又嫉妬デ別品ノ女中ヲ歐チ殺シ獄ニ下リタリトアリ實ニ芝居ニデモアリサウナ珍事ニテ面白ク存候」

となっており、『唐女郎魚玄機詩』が佐佐木信綱氏から送られたのは、明治三十七年二月九日より少し前である事は容易に推測される所である。しかし、『唐女郎魚玄機詩』を素材にして、執筆しようと思ったのが大正四年であるから、史料を入手してからそれが作品に結晶するまで月日の懸隔が大分あり、この点が問題となる所である。この点については後述するとして、執筆の意志が動き出したのがいつ頃であったかをもう一度考えてみよう。日記によつて關外の文学作品の執筆に關しての動靜を探ぐつて見ると、

大正四年、  
五月 五日 應制の詩草成る。

五月 十四日 二人の友を書き畢りて北原隆吉に送寄す。

應制の詩を書す。

五月 十五日 應制の詩を書して獻じまつる。

五月二十二日 我一生の題簽を書して大橋渉に交付する。

五月十四日の『二人の友』以後は『魚玄機』までは何も書いていない。とすると、先程六月四日に引いた線を一応五月半頃まで下げてもいいのではないかとも思うが、鵬外は三月四日に書きあげた『津下四郎左衛門』の遺聞の調査の爲めになり多忙な日を送っており、更に「應制の詩」「我一生の題簽」の作成等から考えて、鵬外が『魚玄機』執筆の気持を動したのは、五月下旬頃から六月初めにかけての時期だと考えて大過なかるうと思う。しかし、ここで考えなければならぬのは前述した書簡に見えている如く、鵬外自身大變興味を示しながら、この時期に執筆せず、十有余年経た後に筆を執つたという事実をどう解釈すべきであらうか。いかなる原因がそこに関与しているのであろうか。その原因を究明する時、どうも鵬外の退官という事と非常に深い関係があるように思う。今この点について考えると、九月十六日の日記に「婦女通信予が引退の報を傳ふ。東京諸新聞の記者悉く來訪す。」とあり、更に正式に引退の事を次官大嶋健一氏に伝えたのが、十一月二十二日である。そして九月十六日引退の報が出る数ヵ月前の鵬外の心的状態を考えると、五月十四日に「應制の詩」を書きあげた鵬外と、七月十八日「韶鮑」と言う漢詩の一句「老來殊覺言情薄」との間に、雲泥の差がある事を見逃す事は出来ない。少くとも、九月十六日引退の報が伝わる二三ヵ月以前は、引退をめぐって、かなり複雑な気持を抱いていたのではないかと思う。引退の直接的な原因は不明であるが、この時期に陸軍省医務局で鵬外が身を退かなければならないような事件があり、それ故

にもやもやとした充たされない気持が、渦巻いていたのではなからうか。その様な時期に『魚玄機』が書かれたという事実は注目してよいと思う。と言うのは、鵬外は魚玄機という唐代の女詩人に興味を抱いたと言うよりも、寧ろ温飛卿により強い興味と共感を抱いたのではなからうか。と言うのは、明治三十七年佐佐木信綱氏から『唐女郎魚玄機詩』を送られた時は、魚玄機の特長な生き方に引かれた事は事実であるが、それから十有余年経た後に、いまままで坐りなれた陸軍軍医総監医務局長の職を退ぞかなければならなかつた時、ひしひしと迫りくる老の寂しさ、不平不満、いらいらした焦燥感、空虚感を感じ、魚玄機その人よりも、唐代の複雑な社会機構の中で反骨精神を貫き、反逆的な生き方をした魚玄機の師である温飛卿により強い共感を持って接したのではなからうか。しかし、この作品が『温飛卿』とならずに『魚玄機』となつた所に、一考を要する問題が残されていると言わなければならぬが、今の所、鵬外がこの作品を執筆しようとした心と動かししたのは、退官時に生涯その反逆精神を貫き通した温飛卿という人間に、より一層興味と共感を持った為であらう。と考へて論を進めたい。

## 二

次にこの小説に用いられている原史料について吟味してみよう。鵬外の歴史小説にはかならず、その小説の基調をなした原史料が使われているのが常である。それは鵬外自らその参考史料を明記してあるものもあり、いないものもある。かの『寒山拾得』

の縁起に於いて「子供にした話を、殆其儘書いた。いつもと違て、一冊の参考書をも見ずに書いたのである。」と、作品成立の事情について自から書いてある作品でさえ、「殆其儘書いた」と言う言葉をそのまま受け取れぬ点がある。(注3)ところが、この「魚玄機」には参考史料として、

其一 魚玄機

三水小牘

太平廣記

續談助

唐詩紀事

全唐詩話

其二 溫飛卿

舊唐書

新唐書

全唐詩話

唐詩紀事

六一詩話

滄浪詩話

彥周詩話

三山老人語錄

雪浪齋日記

南部新書

北夢瑣言

唐才子傳

全唐詩(姓名下小傳)

唐女郎魚玄機詩

漁隱叢話

北夢瑣言

桐薪

玉泉子

南部新書

握蘭集

金筌集

漢南真稿

溫飛卿詩集

魚玄機関係の参考史料十冊、溫飛卿関係十八冊、両者の重複を省いても二十四冊と言う歴大な史料が記るされている。それ故に、従来鷗外はこの史料全部を使ったものでは無く、恐らく二三冊の

便利な史料に依つたものであらうと言われているが、(注4)東京大学所蔵の鷗外文庫を調べて見て、参考史料本を使用したのは「唐女郎魚玄機詩」、「全唐詩」(鷗外が参考史料として明記した以外の別本)「溫飛卿詩集」の三冊のみであると言う結論を得たので、その点について述べてみたい。「唐女郎魚玄機詩」の巻末に「附録魚玄機事略」が掲載されており、そこに掲載されている諸本の抄出が、鷗外自から参考史料として記している十冊の参考史料本である。今この史料について検討してゆくと、

唐西京咸宜觀女道士、魚玄機、字幼微、長安里家女也。……  
 在獄中、亦有詩曰、易求無價寶、難得有<sub>レ</sub>心郎。明月照幽隙、清風開<sub>二</sub>短襟<sub>一</sub>。此其美者也。

右魚玄機事略、一則見太平廣記報應類二十九、題爲<sub>二</sub>綠翹<sub>一</sub>。後注云、出三水小牘。按三水小牘、近世所傳、皆輯本。此篇即從廣記錄出。余檢宋人續談助卷三、引三水小牘、云、

とあり、「太平廣記」からの引用である事は明白であるが、更に「太平廣記」は「三水小牘」からの引用であり、「續談助(卷三)」も「三水小牘」からの引用である事がわかるが、「太平廣記」に比較して記述は簡略である。「唐詩紀事」、「全唐詩話」、「南部新書」についても同じ事が言える。よって鷗外は「太平廣記」を底本として、

「三水小牘」から、

魚玄機字幼微長安倡家女也

倡家を取りあげている。

「北夢瑣言」から、

威通中爲李億補闕、執箕帚、後愛衰、下山、隸威宜觀、爲二女道士、……京兆尹、溫璋殺之、

李億、尹という官職名をふして、温璋の名を取りあげ、

「唐才子傳」からは、

復與温庭筠交遊、有相寄篇什。嘗登崇貞觀南樓、觀新進士題名、賦詩曰、「雲峯滿目放春情、歷歷銀鈎指下生、自恨羅衣掩詩句、舉頭空羨榜中名」、觀其志意激切、使作男子

温飛卿との交遊の事、崇貞觀に於ける賦詩を取りあげている。

「全唐詩（姓名下小傳）」は「唐才子傳」に同文である事から考えて、鵬外は「唐女郎魚玄機詩」の附録「太平廣記」を底本として、それに載っていない記事を「三水小牘」、「北夢瑣言」、「唐才子傳」並びに魚玄機の詩数篇から取捨選択し、組合せ、魚玄機伝を構成したものであろう。更に「全唐詩」を用いたであろうと考える根拠は、「唐女郎魚玄機詩」の「感懷寄人」という漢詩の八連目が「仍羨世人□」と五字目が欠字になっているが、小説中には「欽」の字を補っている所から考えて、「全唐詩」による補筆であるうと思われる。

一方温飛卿の方はと言うと、これも用いた参考史料本は『温飛卿詩集箋注』のみであり、詩集の巻頭に「舊唐書本傳」があり、次に附録諸家詩評として「全唐詩話」以下鵬外が記している参考史料本の抄出が載っている。今具体的に検討していくと、

温庭筠者、太原人、本名岐、字飛卿、（新書一庭筠彦博孫）

大中、初應進士……爲方城尉、再遷隋縣尉、卒（舊唐書本傳）

「舊唐書本傳」を基として、これに無いエピソード的な記事を、「全唐詩話」から、

庭筠每入試、押官韻、作賦、凡八叉手、而八韻成時、號温八吟、（紀事作又）……宣宗嘗賦詩、上句有金步搖、未能對遺、求進士對之、庭筠乃以玉條脫續之、宣宗賞焉……宣宗愛唱菩薩蠻詞、丞相令狐綯其修撰密進之、戒令勿洩、而謫言於人、

「唐詩紀事」から、

令狐綯曾以舊事訪於庭筠、對曰、事出南幸、（一作奉陽下同）非僻書也、或冀相公鑒理之暇、時宜賢古、

「北夢瑣言」から

庭筠又每歲舉場、多爲舉人假手、侍郎沈詢知舉、別施鋪席、庭筠不與、諸公鄰比、

「桐薪」から

温貌甚陋、號温鍾道、

「玉泉子」からは、

故庭筠卒、不中第、其姊趙媼之妻也、

「新唐書」（舊唐書本傳）に含まれており、本伝と異なる所だけ「新書曰」として記してある。）からは、

庭筠思、神速多爲人作文、大中末、試有司、廉視、尤謹。庭筠不樂上書、于餘言然。私占授者已八人、

右の文を引用しており、「六一詩話」、「滄浪詩話」、「彦周詩話」、

『三山老人語録』、『雪浪齋日記』、『漁隱叢話』、『南部新書』等は詩評などが記述されており、直接小説の史料としては用いられていない。「握蘭集」、「金笠集」、「漢南眞稿」の三冊については「舊唐書本傳」の中に『庭筠著述頗多』とあり、具体的には「新唐書」に「握蘭集」以下の書名のみが載っている所から考えて、この書には目を通うしてはいないと思われる。あるいは、既にこの時代にこれらの本は伝わっていなかったのではないだろうか。もしこの事を正しいとするならば、当然鵬外も見ざる由も無かつたであらうと思われる。よって、「舊唐書」(「新唐書」)を基として、「全唐詩話」、「唐詩紀事」、「北夢瑣言」、「桐薪」、「玉泉子」から記事を取捨選択し、それらを組合せて温飛卿伝を構成したものと思われる。

こうして魚玄機伝と温飛卿伝とを形作り、鵬外はそれらを組合わせ、配列し直したに違いない。(この様な史料の分解、整理、統合は『大鹽平八郎』『ぢいさんばあさん』等に見られる。)しかも、その整理、統合の仕方を見ると、鵬外は史料によって魚玄機伝を形成はしてみたものの、漠然としか魚玄機の一生を把握出来なかつたのではないかと思う。つまり、肝心な魚玄機自身の性格、心の動きというものが、如実に把握出来なかつたのではないだろうか。そこで鵬外は史料を離れて、自由に想像を飛躍させた事によって、(歴史離れをすること)魚玄機を構成したものであらう。但し、温飛卿に関する限り魚玄機の場合と違って、ほほ史料がそのままの形で使われており、それはあたかも『安井夫人』の場合とよく似ている。

以上検討して来た史料を、鵬外がどの様な形で作品に形象化し ていったか。その点について考察してみよう。

温飛卿関係の史料に於いて、魚玄機に関する記述は全く無い。魚玄機の方ではわずかに「唐才子傳」に見える『與温庭筠交遊有相寄篇什』という箇所と、『唐女郎魚玄機詩』であるが、そこには温と魚機との交渉があることはうかがい知ることができるが、小説に於いて、「或る日温が魚家に訪ねて来た。美しい少女が詩を作ると云ふ話に、好奇心を起したのである。」と温と玄機とが対面する場面を描く事によって、史料に厚みを加えている。この対面の場面を描く為に鵬外が設定した伏線こそ、二つの史料を有機的に結びつける重要なポイントとなっている。すなわち、「舊唐書本傳」の中の一節(「妻誠令狐滴之徒相與痛飲。酣醉終日。由是累年不第。」)を小説に於いては、「魚家の妓數人が度々或る旗亭から呼ばれた。客は宰相令狐綯の家の公子で令狐滴と云ふ人である。……それに今一人の相伴があつて、此人は温姓で、令狐や斐に……妓等が魚家に歸つて、頻に温の噂をするので、玄機がそれを聞いて……妓等も亦温に逢ふ毎に玄機の事を語るやうになつた。」と、わずかに二十字足らずの史料を巧みに使う事によって、温と玄機との交渉を美事に描ききっている。

さて、この様に結び合わされた史料は、いかなる形で形象化されていったらうか。

(A)史料をそのままの形で小説中に導入する事によって。

(1) 小説中にある漢詩「賦得江邊柳」、「贈鄰女」、「寄飛卿」、「感懷寄人」、「冬夜寄溫飛卿」(小説中にある「滿庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈」の題)は、『唐女郎魚玄機詩』から採択したのである。

(2) 「客有下其于機室者因没於後庭當座上見青蠅數十集於地驅去復來詳視之如有血痕且腥客既出竊語其僕僕歸復語其兄其兄爲府衙卒……發之而綠翹貌如生卒遂錄玄機京兆府吏詰之辭伏」(太平廣記)を小説に於いては、「其中の一人が涼を求めて觀の背後に出ると、土を取った跡らしい穴の底に新しい土が填まつてゐて、其上に綠色に光る蠅が群がり集まつてゐた。……これを自己の従者に語つた。従者は又これを兄に語つた。兄は府の衙卒を勤めてゐるものである。……綠翹の屍は一尺に足らぬ土の下に埋まつてゐたのである。京兆の尹溫璋は衙卒の訴に本づいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫も辯疏することなくして罪に服した。」となつてゐる。

(3) 溫飛卿関係については既に述べた通り、二三の箇所をのぞいては、ほぼ原史料がそのままの形で使われていると云つても差支えない。一例をあげるならば、「醉而犯夜、爲眞候所、擊敗面折齒、方還揚州、訴之令狐捕眞候治之、極言庭筠狹邪醜迹、乃兩釋之自是、汗行聞於京師、庭筠自至長安致書公卿問」(舊唐書本傳)の史料が小説に於いては、「或る夜妓院に酔つて眞候に撃たれ、面に劍を負ひ前齒を折られたので、怒つてこれを訴へた。綱が溫

と眞候とを對決させると、眞候は盛んに溫の汗行を陳述して、自己は無罪と判決せられた。事は京師に聞えた。溫は自ら長安に入つて、要路に上書して分疏した。」となつてゐる。

(田)史料を何らかの形に変ずる事によつて。

(イ) 史料の不完全さを補筆する事によつて。

(1) 「一日、機爲鄰院所、遂將行試翹曰無出、若有客但云在某處……綠翹迎門曰適某客來」(太平廣記)とあつて具体的に客の名が明記されていない。それを囑外は「陳某」として、小説中に登場させてゐる。勿論この補筆は史料によつて行われたものではない。史料による補筆の例は「京兆府吏……至秋竟戮之」(太平廣記)の記述を「北夢瑣言」から補つて、完全な形にしてゐる。すなわち、「京兆尹、溫璋殺之」

(ロ) 史料を踏えて發展させる事によつて。

(1) 「咸通中爲李億補闕、執箕箒、後愛衰下山、隸咸宜觀爲女道士」(北夢瑣言)史料中「李億」「愛衰」「爲女道士」という語句から、魚玄機と李億との交渉を描き出している。

(2) 采蘋との関係も「唐女郎魚玄機詩」の「贈鄰女」という漢詩から導き出されたものである。

(ハ) 史料を切り捨てる事によつて。

(1) 「翹自執巾盥、數年、實自檢御、不令有似是之過致、作尊意……幸鍊師無疑、機愈怒、裸而答、百數。



- × P. 382(1)―(2) P. 382(3) P. 382(4)―(6) P. 382(9)―(10)  
 × 唐才子傳 × 新唐書 × 唐詩紀事  
 P. 383(1)―(7) P. 383(8) P. 383(9)―(10) P. 383(11)  
 × 全唐詩話 × 北夢瑣言 × 玉泉子 × 北夢瑣言 P. 385(1)―(5)  
 P. 382(9)―384(4) P. 384(3)―385(3) P. 385(11)  
 × 舊唐書 ○ 唐女郎魚玄機詩 ○ 太平廣記  
 P. 386(1) P. 386(2)―(3) P. 386(4)―(6) P. 386(9)―387(8)  
 ○ 唐才子傳 ○ 唐才子傳 ○ 唐才子傳 ○ 唐才子傳  
 P. 387(9)―(10) P. 387(13)―388(7) P. 388(8)―(11)  
 ○ 唐女郎魚玄機詩 ○ 太平廣記  
 P. 388(12)―389(8) P. 389(4)―(7) P. 389(8)―(9)  
 ○ 太平廣記 ○ 太平廣記 ○ 太平廣記  
 P. 389(11)―(13) P. 390(1)―(8) P. 390(9)―(11) (全唐詩)  
 ○ 唐女郎魚玄機詩 ○ 唐女郎魚玄機詩 ○ 唐女郎魚玄機詩  
 P. 390(14)―392(2) P. 392(3) P. 392(4)―(5)  
 ○ 唐女郎魚玄機詩 ○ 唐女郎魚玄機詩  
 P. 392(5)―(6) P. 392(7)―393(4) P. 393(5)―395(4) P. 395(5)  
 ○ 太平廣記 ○ 太平廣記 ○ 太平廣記 ○ 北夢瑣言  
 P. 395(13)―396(7) P. 396(8)―397(2) P. 397(3)―(3) P. 397(4)―(5)  
 ○ 太平廣記 × 舊唐書 × 全唐詩話 × 舊唐書

#### 四

以上いろいろな面から作品を検討して来たのであるが、最後に、この作品の主題、史料の形象化に対する批判、及び作品の評価に言及したいと思う。

この作品で、鵬外が描こうと意図した主題は何であったらうか。情熱あふれる才たけた、女流詩人の悲劇的生涯を描いたことは明白であり、それはそれなりに描けているが、しかし、詩人を

悲劇へと誘っていく過程の叙述に問題がありそうである。つまり、悲劇への要因を作品中から指摘し得るものは、

- ① 魚玄機の嫉妬心の発現。
- ② 魚玄機の名誉欲。
- ③ 魚玄機の性欲の発現。

の三点で、これらが有機的に統一された形でカタストロフィへと導かれていれば問題はないが、どうもこの要因相互の緊密性に欠けているように思われる。一体この様に主題への過程の叙述が不鮮明な原因は何であろうか。今その原因を究明するにあたって、史料の形象化の仕方を再検討してみよう。

各々の史料についての「歴史離れ」の仕方は、それぞれ巧みであるが、悲劇への過程の叙述にあたって「歴史離れ」の方向が不統一であり、かろうじて史実を貫いて全体をなしているのが、前述した悲劇への諸要因である。そして更に言うならば、鵬外の魚玄機の描き方が、非常に軽く表面をなぞっており、火の様な恋愛に（その中には、当然、嫉妬や性欲の問題も含まれてくると思うが）身を投じてゆく魚玄機を描けなかつた所に、この作品の致命的な欠陥があったと言わざるをえない。その原因は、鵬外が逆逆の詩人温飛卿に限りない共感を持ちながら、魚玄機を描いたという点である。心の中では、より強く共感した温飛卿に焦点をあてながら、鵬外の筆は意志に反して魚玄機に向けられており、それ故に、魚玄機を描きながらも、どこか心の中の温飛卿に引かれ、自由に魚玄機を描けなかつたのであろうと思う。それと言うのも、鵬外の退官を前にして嵐の如き心的状態の中で生みだされた

という特殊な事情が、介入したためであろう。その為には鵬外の眞の気持が卒直に吐露されず、内に込められてしまった為、魚玄機にしても、温飛卿にしても、や中途半端な人物に定着してしまつたのではなからうか。鵬外の卒直な気持の吐露は、引退の報が新聞に伝えられた翌日（大正四年九月十七日）に書きあげた『最後の一句』をまたなければならぬのである。

作品を退官時の不平不満との關係に於いて論じてきたが、それはあまりに鵬外がスケールの小さい人物になるのではないか、との反駁も起らう。現に、平岡敏夫氏は、退官時の不平不満説を主張する唐木順三氏に反駁して、大正四年九月十六日「婦女通信」が引退を報じた翌日の「読売新聞」の記事を引用し、更に歴代医務局長在任期間を調べ、「そこに心ならずも退官する理由はなにもなかつた」と述べ、「更にその不平不満を作品に結びつけたとき、いささか鵬外のスケールが小さくなつてくるうらみがある」と言い、「詩や作品にはの見えている鬱憤めいた句は底流の上にかぶ泡にすぎなかつた」と述べているが、はたしてそうであるうか。私は唐木説に賛同を禁じえない。なぜならば、表出のあまり良くない鵬外が、引退の報が出たからと言つて、まだ医務局長という公的な地位にあることを考え、更に、新聞という公的機関での発言という点を合わせて考慮してみると、引退の心境の披露を掲載した「読売新聞」も絶対的な切り札にはなりえないのではなからうか。又、かつて「陸軍軍医学校五十年史」を調べた事があるが、確かに鵬外の医務局長在任の期間は長い、停年まで務めずに退官したという点を考えなければならぬ。秩序を破

壊することをなによりも嫌つた鵬外が、その職責を完遂せずに退いた所に何かあるのではなからうか。更に、「韶靴」の詩、「空車」「澀江抽齋」の冒頭の述志等に表わされた大なる不平不満は、やがて抽齋という偉大な人間像に向かつて歩を進める内に、いっしか不平不満といううちっぽけなものを大きな人間性の中で清められ、昇華されていったのである。そんな境地を「観潮樓閑話」の中で、『此等の伝記を書くことが有用であるか無用であるかを論ずることを好まない。只書きたくて書いている。』と述べている。鵬外の不平不満は決して平岡氏の言う如く、底流の上に浮ぶ泡にすぎなくてはなかつた。不平が不平として終るならば、なるほど、それはスケールの小さい俗物であるが、その大なる不平が抽齋を追求するうちに、大なるシンパシーとなり、愛情となり、尊敬となつて次第に昇華されていくうちに不平不満が浄化され、やがてあの様な偉大な史伝小説を生み出したのであらう。

とまれ、今問題にしてゐる『魚玄機』の「歴史離れ」の仕方は、どうも稲垣達郎先生が『安井夫人』で考察した如く、「二つの床の間に、寝苦しそりに寝ている。」と言つても過言ではなからう。それは、大正四年九月に発表された『ちいさんばあさん』（『新小説』、第二十年第九巻）の如く、歴史のかたい繫縛はななく、史料が完全に作品に定着し、結晶度の高い作品（私は鵬外の歴史小説の傑作であると考えている。）から比較すると、数段低い位置に甘んじなければならぬが、退官をめぐつて織りなされた鵬外の平穩ならざる心的状態が内的な形を取つており、鵬外の歴史小説の流れを考える時、作品の結晶度は高くはないにしても、

重要な意味を持った作品である事には変りがないと思う。

- 注1 『唐女郎魚玄機』(士禮居藏宋版を清の道光元年に覆刻したもの)——中国線装本、縦二十六・二cm、横十五・五cm——一丁(表)の右側に毛筆(黒墨)で「佐々木信綱君将来」と鴨外の書入れがあり、その下に「鴨外藏書」の押印がある。そして、「贈鄰女」の詩の上部余白に毛筆(黒墨)で、「隨園詩話卷九云易求無價寶難得有心郎女眞蕭蕭詩也」と書き込みがある。——東京大学所藏鴨外文庫本。
- 2 鴨外の日記、書簡及び「津下文書」(天理大学の森潤三郎氏旧藏の鴨外文庫本)等によつて窺ふ事ができる。「津下文書」については、私の卒業論文中に「津下四郎左衛門」の史料として掲げてある。
- 3 従来この原史料は「寒山子詩集序」であると言われているが、東京大学所藏の鴨外文庫目録には「釋日陰『寒山詩闡提起聞』」が載っている所から考へて、これらの本が『寒山拾得』執筆にあずかつたのではないだろうか。しかし、現在「釋日陰『寒山詩闡提起聞』」の原本が東京大学に見つからないので断言することはできないが。
- 4 稻垣達郎先生は「『安井夫人』について」——歴史其儘と歴史離——(『文学』第十四卷第十二号、昭和二十一年十二月号)という論文の中で「又『魚玄機』のやうに、二十四部におよぶ参考書を附記してゐながら、その實、必ずしも多くを漁つたのではなく、便利な教本に據つたのではないかと考えられる場合もあるやうである。『魚玄機』の典

據については、わたしはそのやうに判断してゐる」(四四頁)と述べておられる。

5 『全唐詩』は東京大学所藏の鴨外文庫の中にあり、(鴨外藏書印あり)この本を鴨外が調べたであろう事は推測に難くない。

6 『溫飛卿詩集箋注』(秀塾草堂原本)宣統二年五月出版、九卷四冊本。但し、鴨外は一卷から四巻まで、五巻から九巻までの二冊本に製本し直している。一卷と五巻の一丁の右下隅に「鴨外藏書」の押印がある。——東京大学所藏鴨外文庫本。

7 『中国歴代図書辞典』(一名中国歴代芸文志)——中華民国四十五年十一月初版、本公司編輯部編著、浦家麟發行遠東圖書公司出版——に依ると「唐書藝文志」に「溫庭筠握蘭集三卷、又金筌集十卷、詩集五卷、漢南真稟十卷」とあるのに「宋史藝文志」によると「溫庭筠漢南真稟十卷、又集十四卷、蘭握集三卷、記室備要三卷、詩集五卷」とあり、すでに「金筌集」の名が見えない。「元史新編藝文志」になると、溫庭筠の著書の名は全くみえない。以上の事から考へて、唐代には「漢南真稟」、「金筌集」、「握蘭集」とあつたものが、宋代には「漢南真稟」、「握蘭集」の二冊となり、これらも元代に伝わらなくなつてしまつたのではないかと思われる。

8 雑誌「解釈と鑑賞」(昭和三十五年秋の臨時増刊号、至文堂刊)「近代作家の研究」法の中の「森鴨外の歴史小説

と史伝』一〇一頁参照。

### 附記

1 本論考は一昨々年早大国文学会(1961.10.29(日))於小野講堂)に於いて「森鷗外の歴史小説『魚玄機』の原史料について」という題で研究発表したものに、再考を加え、整理したものであるが、当時は筑摩版の注釈鷗外全集も発刊されておらず、今度それに接し、有益なる示唆(特に魚玄機の性欲の叙述をFictionと考えていたが、平塚雷鳥氏と「青轡」との関係に於いて、尾形叡氏は注を付けられている)を受けた

点もあるし、又史料について、結論について相違も見られるので、ここに発表し、助言と批判を賜りたいと思います。

2 東京大学所蔵の鷗外文庫閲覧に際し、青野伊子児氏、藤堂明保氏、尾上兼英氏、大野実雄氏、船津富彦先生の配慮を賜わり、研究発表に際し、川副国基先生、紅野敏郎先生、大矢根文次郎先生、船津富彦先生、上野理氏、中沢保氏の懇切な御指導と助言を賜り、更に、今度の発表に際し、稲垣達郎先生の御指導を受けたことを合せ記して、ここに感謝の意を表したい。

—一九六三、十二、十五—

## 報告

### 早稲田大学国語学会の動向

早稲田大学国語学会ができたのは、昭和三十六年十二月二日です。以後、十月一日から始まって九月三十日に終わる会計年度を繰り返すこと二年、会員数は百人ちよつとですが、例会の出席者は三十人くらいの、まとまりのいい若い学会です。

会員は早大の教員、卒業生、学生が中心です。会の特色は、例会には必ず会長の時枝先生が出席されること、どちらかというといふと固い内容の研究発表です。以下、例会の題目と発表者の氏名を挙げ

ておきます。

第一回(昭和37・4)現代語法ノート「デス」の一用法 辻村敏樹。「どろんこ」と「どろんけん」 石綿敏雄。第二回(37・5)平安貴族の言語生活 岩淵正。講式の音声の一考察 金井英雄。第三回(37・6)源氏物語の語法 「奉れ」について 堀内武雄。戦後の漢字政策をめぐって 石久久。第四回(37・9)所謂準体助詞の「の」について 山口佳也。今昔物語の語法一二 桜井光昭。第五回(37・10)日本語、朝鮮語の対照研究に関する検討 竹端燎一。馬琴日記に見られる近世言語生活の一端 石井久治郎。第六回(37・12)研究課題の求め方について 時枝誠記。中国の文字改革

の基準について 陣内宜男。第七回(38・4)時枝誠記氏の「和歌史研究の一観点」を読む 藤平春男。第八回(38・5)イントネーションのはなし 宮地裕。第九回(38・6)説話文と伝承についての一私見 国東文麿。第十回(38・11)且について 加藤諄。第十一回(38・11)つれづれ草の一節「人のめたつ」「人のめだつ」について 白石大二。第十二回(38・12)たどりよみ方式。鑑賞はありえない。時枝誠記(討論会形式。早稲田大学国語学会と共催)。第十二回の討論会形式が好評だったので、三十九年四月にも、「国語辞書の問題を回って」という題で討論会を開く予定です。(桜井)